海部の地理（八）

―津久見―

矢野彌生
（会員・佐伯市中山区）

津久見市の概要　津久見市は、大分県の南東部に位置し、東は豊後水道西岸の津久見湾に臨む。他の三方は古生層山地に囲まれ、沿岸部はリアス式地形をなし、山地が大部分を占めて、平野に恵まれない。平野は、青江川や津久見川の狭小な谷底平野があるにすぎない。

この地域は、北から西にかけて厚い石灰岩層が分布し八戸高原は石灰岩の台地で、カレンフエルトやドリーネなどのカルスト地形が見られる。この地域の気候は南海型気候を示し、温暖・多雨で、年平均気温一六・四度、年間降水量二一九三ミリメートルである。

津久見地区は、古代は豊後国海部（ぶんごのくにあまべ）郡の穂門（ほと）郷に、中世は臼杵荘に属し、近世は佐伯・臼杵両藩に二分された。

近代に入って、明治四年（一八七一）の廃藩置県でも佐伯県・臼杵県に二分されたが、十一月、大分県に統合された。明治二十二年町村制施行により四保戸（よほと）日代（ひじろ）・津組（つくみ）・青江（あおえ）・下浦（したうら）の五か村となり、明治二十五年、四保戸村は、保戸（ほと）島と四浦（ようら）とに分離して六か村となった。大正十年（一九二一）、津組村が津久見町となり、昭和三年（一九二八）、青江村も町制をしいた。同八年には津久見町・青江町・下浦村が合併し、県下第二の大きな町となる。

昭和二十六年（一九五一）、津久見町・日代村・四浦村・保戸島村が合併して、津久見市が誕生した。セメントとミカンは全国的に有名であるが、そのほか保戸島のマグロはえ縄漁業は九州屈指のものである。

津久見港は、昭和二十六年、重要港湾の指定を受け、貿易港として大型船舶の出入りも多い。平成二年（一九九〇）現在、人口二万六千七百九十七人、世帯数八千七百九十二世帯。

地形の人工改変著しい胡麻柄山周辺　下り列車が徳浦トンネルとその南の短いトンネルを抜けて、津久

津久見市街地と胡麻柄山周辺の石灰石採掘

見の町にそろそろと入っていくとき、真っ先に眼につくのは、レールの左右に荒々しく肌をむき出してそそり立つ、白い岩山―石灰岩の採掘場だ。国道バイパスで北から津久見に入っても同じ。旧国道ならば、峠のトンネルを出てやや下ると眼に入ってくる。小野田セメントの巨大な赤白のだんだら煙突が、まず、津久見市を刻印するそして麓に下ると、道をはさんで林立し、あるいは頭上をまたぐ、鋼鉄の樽や、タンクや、倉庫や、太いパイプやらの、怪獣さながらのからまり合いが人を圧するのである。現に、これは国道というよりは、セメント工場の敷地の中の私道ではないかと言いたくなる光景である。津久見湾と、町の背後に折り重なるように広がるミカンの山も美しいが、なんといっても津久見はセメントの町である（1）。

地方都市で、津久見市のように著しい地形の人工改変が行われ、将来に向けて地形の改変が進行している所は少ない。これは、窯業の原料である石灰岩を大規模に採掘しているからである。現在は、胡麻柄山（ごまがらやま）（標高六五七メートル）周辺などは、日ごとに山容を変えている。特に、日豊本線の東側の石灰岩採掘場で

は山全体が消滅してしまった。

昭和四十四年修正の「臼杵」図幅の地形図を見ると、水晶山は、まだその全容をわずかに残している。また、明治三十六年（一九〇三）測量の地形図では、高登山（標高二五八メートル・水晶山の古い呼称）の三角点が付されているのを見ることが出来る。

一方、津久見湾奥部でも、青江川や津久見川の河口付近を中心に埋め立てが行われ、市街地が拡大され、住宅・工場・商業・漁港などの用地が造成されてきた。また、明治三十六年の地形図では、現在、小野田セメント工場用地として埋め立てられ、陸続きとなっている野島は、まだ島として描かれている。

津久見市が発足以降の公有水面埋立事業は六十件近くに達している。津久見市の海岸線約八八・八キロメートルのうち、自然海岸が残されている距離は、全体で約四七・四キロメートルで、全海岸線の五三・四％に過ぎない（2）。

限りある市域の土地利用に当たっては、市民生活の安定と向上のためには公有水面の埋め立てや、山野の開発も必要である。しかし、自然との調和を図り、自然地形の保護をしていくことは、今後の土地開発の大きな課題である。

南海型気候の北限地帯

津久見市は、豊後水道から約八キロメートルほど深く切れ込んだ、リアス式の津久見湾岸に沿って広がっている。三方は古生層山地で、他市町との境界はほぼ四〇〇―五〇〇メートルの分水嶺となっている。このような地形は、冷たい冬の季節風をさえぎり、豊後水道に入り込む黒潮分流は沿岸海水の温度を高めている。

図１　大分県の気候区分
（川西　博　昭和63年）

いま、大分県の気候区分から津久見市の気候の特徴を見ると、図１のとおりである。すなわち、津久見市と臼杵市との境界線付近が瀬戸内型と南海型と

の境界となっており、津久見市は南海型気候の北限地帯に相当していることが分かる。しかし、気候区の境界は一つの目安を示すものであって、明確な境界が此処を通っているわけではない。気候区というのは、一つのタイプから他のタイプへと次第に移って行くものだからである（3）。

津久見市の八月平均二七度C、一月平均の気温は六度Cで、降雪は稀である。年間の平均気温は一六・四度C年間の降水量は二一九三ミリで、温暖多雨である。臼津半島以南の津久見市は臼杵市（瀬戸内型）に比べ、年間降水量は、数百ミリも多い南海型を示す（図2参照）。しかし、気温については大差はない。このような南海型気候のため、津久見は古くからの品質の良いミカン産地となっている。

市街地の発展

津久見市は、藩政期には臼杵・佐伯の両藩に分割統治され、当時は半農半漁村に過ぎなかった。明治三十六年（一九〇三）測量の五万分の一地形図「臼杵」図幅を見ても、津久見湾奥部の小平地に家屋が密集した集落は見られない。

しかし、昭和八年（一九三三）、津久見町が発行した市街地図を見ると、津久見湾奥部のセメント町・警固屋町・小網代町・角崎・本通り（現本町）・中通り（現中央町）・高洲町は、市街地の形成をみている。また、津

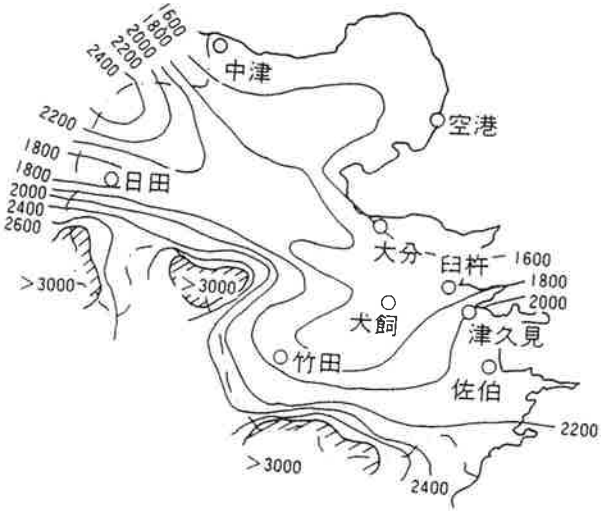

図2　大分県の年平均降水量分布（単位：mm）
（川西　博　昭和63年）

久見駅裏の宮本町一帯は家屋密度が小さく、殆どは水田となっていた。

大正期に都市発展の基礎

津久見市の都市発展の基礎ができたのは大正期である。即ち、大正五年（一九一六）の日豊本線の開通に伴い津久見港も改修され、大正六年桜セメント、同七年大分セメント、昭和四年太平セメントが設立された。

人口も大正中期から昭和初期にかけて急激に増加して市街地を形成し、周辺の農漁村地帯を後背地として津久見市の経済圏が成立した。

津久見市は、石灰やセメント工業が発達する中で、工業都市として市街地も漸次拡大し、県南地域でも臼杵・佐伯に対しても、独立した都市として成長した。

人口集中地区の拡大

最近の市街地の人口集中地区の推移を見ると、表1のとおりである。表1で明らかなように、人口集中地区の面積は、昭和四十年（一九六五）の一平方キロメートルから四十五年一・三平方キロメートル、五十年二・二平方キロメートル、五十五年三・三平方キロメートルと三・三倍に拡大し、六十年には三・二平方キロメートルとやや縮少している。

表1　津久見市の人口集中地区の推移（単位：人、km）

	人　口	面　積	人口密度(人/km²)
昭和40	9,941	1.0	9,941.0
45	10,404	1.3	8,003.1
50	11,902	2.2	5,410.0
55	13,503	3.3	4,091.8
60	12,509	3.2	3,909.1

（「国勢調査報告」により作成）

また、人口集中地区の人口も、昭和四十年から国勢調査ごとに増加しているが、昭和六十年には減少の兆しが見えている。更に、同地区の人口密度は、国勢調査ごとに著しく減少しており、過密化が緩和してきている。

更に、人口集中地区の地理的な広がりを見ると、図3のとおりである。即ち、津久見川と青江川の流域を中心にした地域が人口集中地区になっていることが分かる。また、

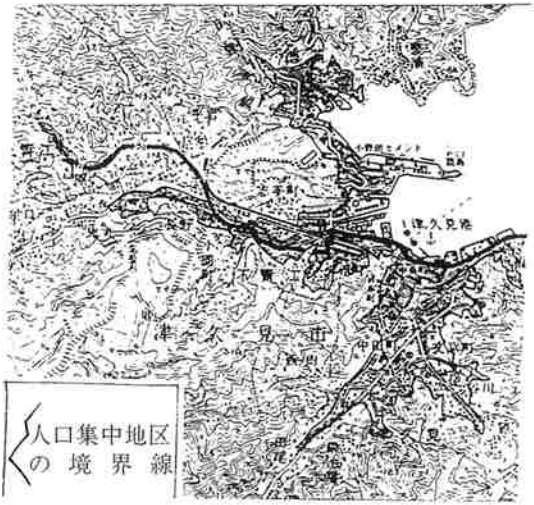

図３　津久見市の市街地（平成２年国調）

徳浦の地域は、昭和四十五年には人口集中地区に該当していないが、昭和五十五年には人口集中地区になっており、都市化が進んでいる。

減少続く都市人口

平成二年（一九九〇）の津久見市の人口は二万六千七百九十七人で、大分県十一市のうちでは、隣接の臼杵市の三万七千八百七十一人に次ぐ第八位の都市である。

津久見市の人口は、明治二十四年（一八九一）以降増加の傾向を見せているが大正期を見ると、第一回国勢調査が実施された大正九年（一九二〇）の人口は、同二年、七年に比較して急激に減少している（図4参照）。これは、現住人口と近代的第一回国勢調査との調査方法の技術的な差異によるものである。即ち、大正八年までの人口は役場の戸籍簿によるものであり、県外に移住したり、他地域に働きに出たりしてても、一々届け出ない者が多いためである。

第二次世界大戦前の最高は、昭和十五年（一九四〇）の二万九千百四十七人で、大正から昭和にかけて津久見市の人口は急激に増加している。

戦後の人口は、配給や米穀通帳によったもので、比較的現住人口に近く、昭和二十二年には津久見市の人口は三万人を突破し、以後急増を見ながら、国勢調査では昭和三十五年（一九六〇）が三万七千百六十四人と、史上最高を記録している。この間、昭和二十六年には市制を施行し、新生「津久見市」の誕生をみている。

戦後の人口が急増したのは、戦争の終結に伴う復員・引き揚げ・結婚の増加などの影響が、一時的に集中したものと考えられる。

津久見市の人口は、昭和三十五年をピークにして、それ以後平成二年まで、国勢調査六期間、連続人口を減少させている衰退都市になっていることは注目される。

津久見市のように、国勢調査六期間、連続人口を減少させている都市は全国にも多く、大分県内でも津久見市のほか竹田・豊後高田がこれに属し、杵築市は、昭和五十五年まで四期間、連続人口が減少しており、昭和六十年に微増したものの平成二年にはまた減少している。

また、津久見市の世帯数の推移を見ると、昭和三十五年八千二十四世帯、四十年八千七百三十九世帯、四十五年八千八百八十三世帯、五十年九千三十五世帯、五十五

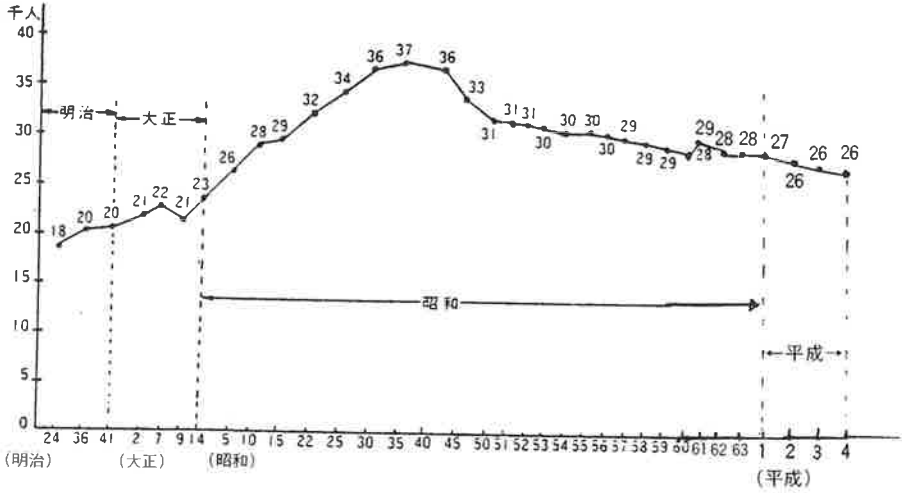

図４　津久見市の総人口の推移
（『津久見市統計書』・『大分県統計書』により作成）

年九千百九十七世帯と一貫して増加しており、核家族化の進行の様子が分かる。しかし、昭和六十年に八千九百六十一世帯、平成二年八千七百九十一世帯と減少してきており、人口減少が単なる労働力流出だけでなく、家族ぐるみの流出がかなり多いことを物語っている。

これら人口減少の背景には、昭和三十年代後半からの全国的な経済の高度成長に伴い、若年労働力が市外に流出したからである。更に、津久見市の場合、昭和五十二年の臼津バイパスの開通により、臼杵市との距離が短縮され、地価の安い臼杵市へ転出者が増加したことや、市内事業所の合理化による労働者の減少、国や県の出先機関の縮少、定員減・農漁業の不振等による若年労働力の市外流出が人口減少の要因となっている。津久見市では今後、労働力指向型・技術集積型の新規の企業の立地を図らない限り、人口増加は期待出来ないのではないかと指摘されている。また、今こそ、津久見市の過疎対策や活力のある町づくり、水・土地などの資源から見た適正規模の都市人口のあり方について、行政や市民の積極的な対応が期待される（4）。

人口増の市街地周辺　人口減の工業地区

津久見市の地区別人口の推移を見ると、表2のとおりである即ち、表2で明らかなように市街地周辺部の彦ノ内・西ノ内のミカン農家の多い地区は人口増加が著しい。また、市街地から離れた千怒（ちぬ）地区は、千怒湾の埋立工事が昭和五十九年に完成（面積一五万三〇〇〇平方メートル）し、住宅建設が進み、人口が急増している。これに対し、工業地区やその周辺の入船・警固屋（けごや）・徳浦など人口減少が著しいのは、セメント工業や石灰工業などの窯業による環境悪化が影響していると考えられる。

また、山間部の胡麻柄山の標高三百メートルの山腹にあった願寺（がんじ）の山地集落（昭和四九年、小野田セメント津久見工場の石灰岩開発のため地区の七世帯三〇人移転）や四浦の仁宅（にたく・昭和五、六年ごろ、珪石採掘のため全戸離村）の集落など廃村化している。更に、山間部の八戸の山地集落では、昭和四十五年二百四十人、五十年百六十一人、五十五年九十一人、平成元年五十人と地すべり的に過疎化が進行している。これはこの地区一帯に石灰岩の鉱区が設定されていること、林

千怒湾の埋立地により成立した新住宅街

表２　津久見市の地区別人口の推移

（単位：人、％）

年度／地区	昭和45	昭和55	平成１	昭45～55 増減率	昭55～平１ 増減率
千怒	1,809	2,147	2,559	18.7	19.2
岩屋	2,349	2,392	1,801	1.8	△24.7
宮本	3,445	2,637	2,287	△23.5	△13.3
彦ノ内	1,429	2,140	2,302	49.8	7.6
中田	1,278	1,732	1,672	35.5	△ 3.5
西ノ内	1,001	1,042	1,336	4.1	28.2
八戸	240	91	50	△62.1	△45.1
警古屋	3,394	2,127	1,610	△37.3	△24.3
入船	1,872	1,019	753	△45.6	△26.1
川上	2,443	1,825	1,660	△25.3	△ 9.0
上青江	2,810	2,802	2,410	△ 0.3	△14.0
徳浦	2,995	2,116	1,606	△29.3	△24.1
堅浦	1,278	1,366	1,261	6.9	△ 7.7
長目	1,212	943	780	△22.2	△17.3
日代	2,519	2,063	1,806	△18.1	△12.5
四浦	2,538	1,833	1,433	△27.8	△21.8
保戸島	3,121	3,046	2,615	△ 2.4	△14.1
総数	35,733	31,321	27,941	△12.3	△10.8

（住民基本台帳人口「津久見市統計年鑑」により作成）

業が不振であること、子供の教育など日常生活が不便なことなどの原因のため、市内への転出が増加したからで今後も同地区は石灰岩採掘が進行するに従い挙家離村があると考えられる（平成二年の国勢調査では十三世帯、人口三十七人）。

小野田セメント工場

藩政期に起源をもつ窯業

津久見市の窯業（ようぎょう）の歴史は古く、寛政三年（一七九一）小園村（こぞのむら・青江）で、臼杵の畳屋町の商人吉田八十治が石灰製造を始めており、伝統がある（5）。

藩政期の石灰焼きは家内工業で、藩政期から米庄・戸高・カネ久に加えて、明治期には日石・古手川・鳥越などの石灰製造所が相次いで創設され、全国で高い地位を占めていた（6）。

セメント工業の成立・発展

本格的な窯業の成立は、日本にセメント工業が導入された明治以後である

津久見では大正五年（一九一六）国鉄日豊本線の開通に伴い、津久見駅が開業、同六年徳浦に桜セメント工場（昭和二年、大分セメントに吸収合併）が創業、同七年には県内有志による資本金三百万円の大分セメントが、昭和九年（一九三四）には太平セメントの両工場が設置されて以来、急激な発展を遂げた。昭和十三年には、大分セメント・太平セメントの両工場を小野田セメントが吸収合併して新たに立地し、県内では佐伯市の日本セメントと共に近代的窯業の中心となり今日に至っている。

技術革新が進む窯業

津久見市の石灰岩は全国でも特に良質といわれ、その埋蔵量四十五億トンともいわれる豊富な資源を背景に工業が成立しており、セメント・石灰の生産を中心とした窯業

が、鉱工業の主軸をなしている。即ち、平成二年（一九九〇）の津久見市の製造品出荷額は四百八十七億七千四十二万円であるが、うち窯業・土石製品は八七・五％を占めて圧倒的に多い。

いま、津久見市の工業の事業所数・従業者数と製造品出荷額の戦後の推移を見ると、図5・図6のとおりとなっている。津久見市の工業の最近の傾向としては、製造出荷額は昭和五十五年ごろまでは増加してきたが、事業所数や従業者数においては、昭和四十年代より絶対減を示しており、全県における相対的地位の低下が著しい。

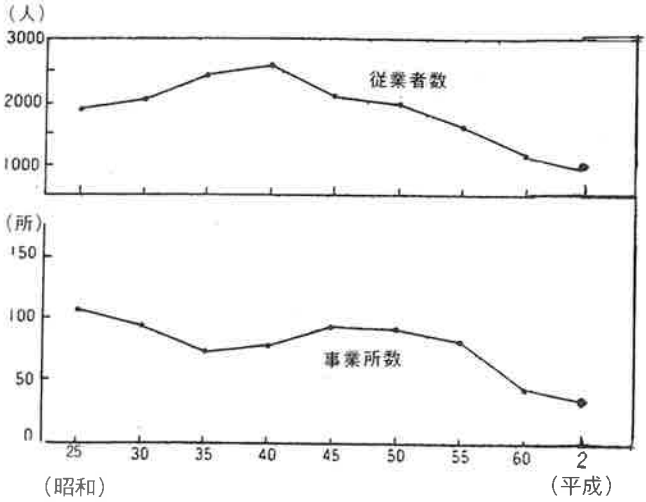

図5　津久見市の事業所・従業者数の推移

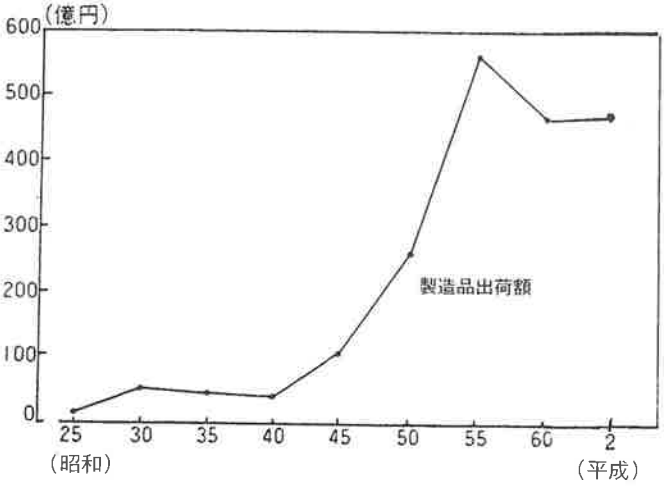

図6　津久見市の製造出荷額の推移
（『大分県の工業』・『津久見市統計書』により作成）

これは、セメント工業や石灰工業における技術革新が進行し、製造工程の自動化・省力化によって、生産高の増加の割には、労働力を必要としなくなったという事情によるものである。

津久見市の工業の特色

津久見市の工業は、今後、労働力指向型・技術集積型の新規の企業の立地を図らない限り、工業人口の増加は期待出来ない。

津久見市の工業の特徴としては、①豊富な石灰岩を基盤とした基礎素材工業の集積が高く、また、市場から遠隔地にあるため、窯業の二次・三次加工といった付加価値を高める業種に乏しいこと。そのために、中間原料・工業素材の供給にとどまっていること。②窯業・土石工業が工業出荷額の九一・六%を占め、工業構成に偏りが大きく、資源指向型の工業が中心で、単一工業都市的性格が強いこと。③工場と住宅地が近接・混在しているため公害が起りやすいことなどが挙げられる（7）。

また、最近では、良質・無尽蔵といわれる石灰石を中間原料・工業素材の供給だけにとどめず、付加価値を高めようと、ファインセラミックスの共同研究開発を進めており、その成果が実りつつある。

註

（1）籠瀬良明・山口恵一郎・堀淳一『地図の風景』（そしえて　昭和五十七年）

（2）後藤正二「都市基盤の整備」（『津久見市誌』津久見市　昭和六十年）

（3）川西博「津久見市の気候」（『津久見市誌』津久見市　昭和六十年）

津久見市の気候や気象の実態については川西博氏によって詳細な調査結果が『津久見市誌』に報告されている。

（4）矢野彌生「津久見市の人文環境」（『津久見市誌』津久見市　昭和六十年）

（5）織田清綱『津久見石灰史』（津久見石灰協業組合　昭和五十年）

（6）中野雅博「豊後水道西域における工業の立地とその性格」（『豊後水道域』大分大学教育学部　昭和五十五年）

（7）矢野彌生「津久見市の窯業の発展と都市人口の減少」（『大分県史』地誌篇　大分県　平成元年）